大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

若きゲーテにおける「不実」と文学：『シュテラ』を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006488

若きゲーテにおける「不実」と文学

——『シュテラ』を中心に——

星　野　純　子

(1)

シュトラスブルクでのフリーデリケ・ブリオンとの不幸な恋愛体験以来、若きゲーテはくりかえしくりかえし自己懺悔の思いをこめて、不実な男、というテーマを形象化してきた。『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』の貞淑なマリーを裏切って、妖婦アーデルハイトの魅力にとらえられる、ワイスリンゲン、野心実現のために許嫁を捨てるクラヴィーゴ、初稿ファウストの中核をなす、グレートヒェン悲劇、そしてここにとりあげる『シュテラ』の、二人の女性への愛と不実に揺れ動く、フェルナンドである。

さて後年ではあるが、フリーデリケとの体験に関連してゲーテはこう述べている。「……自分の愛着の心を否定できない男をあきらめる少女は、それと同じ気持を女にむかって打ち明けた青年がおちいるつらい境遇に長くはいない。青年はいつもつらい役割を演じる。なぜなら、青年は成人しつつある男だから、自分の境遇についてのある程度の見通しを持っているべきだと世間は期待するし、はっきりした軽率さは、青年にはふさわしくないだろう。少女が身をひく理由はいつも正当のように見えるが男のほうは決してそうは見えないのである。」(1) このことばは、不実な男、ゲーテのいいわけではなくて、ゲーテが自分の不実を明晰な意識で見ていたことを示すことばであろう。上にあげた諸作品においてもゲーテは自己懲罰という意図から、時にはその主人公を不当におとしめ、そのために、不実ないしは心がわりの道徳的心理的側面の描写に筆が傾くきらいはあるけれども、決してそれだけにはとどまらない。この場合、裏切るのは男であって、女にとっては「身をひく (sich zurückziehen)」という表現になることはここでの不実が何よりも男と女の社会的なありようのちがいに基くものであることを示している。だから逆に、例えば『ゲッツ』のアーデルハイトのように女の不実が描かれるとき、彼女は、愛情を唯一のよりどころに家庭に生きる受け身の女、マリーのような女性ではなくて、みずからも大きな世間にかかわりたいという意志をもって、領地にとじこもれという夫の要求を拒絶する女なのである。

コルフはこの「不実」という問題を十八世紀の文学史のなかで理念史としてとりあげ、不実を描く重心が道徳的、外的な面から、心理的、内的な面に移ってきたこと、特にゲーテの描いた諸人物のうちに、不実がはじめて内面的な問題になり、それによって、貞節 (Treue) の道徳的偉大さ——クレールヒュンやグレートヒェンなどに見られる、社会の道徳の枠をふみこえずにはいられない運命的な偉大な愛——と同時に、不実の特権 (Ausnahmerecht auf Treulosigkeit) が場合によっては道徳的な義務となり得ることをも意味するようにな

ったのだと分析した。そして「この特権の権原（Rechtstitel）として、生の最高の目的へ向って努力する男と、彼の努力にとっては束縛となる、内的に限界づけられた女との不調和がますますはっきりと現われてくる。そして、男の不安な心に一時的に平安を与えはするが決して永続的な満足を与えることのできない、そのような女に、男が欲望を抱かざるを得ないこと、そしてそれ故に、本来、引き裂かれるように定められているものが、災にみちた運命によってたえず一緒にされるという事情がこの葛藤を悲劇的にする。」と続け、この特権はファウストのように真に偉大な人間にのみその資格があるのだと断定している。(2)

コルフは、男と女の関係が人間にとって自然なそして必然的な関係であること、そしてその関係のなかにも、社会の人間関係の総体――男と女のあり方の不調和が現われてこざるを得ないことを見ながら、そこから生み出される不実を偉大な人にのみ許される特権だと見なした。しかし、不実が必然的に出てくるものであるのなら、それは許される、許されない、あるいは資格のあるなしの問題であろうか。道徳主義的に見るのをやめようとしながら、結局、コルフの論理は、再び道徳的次元に逆戻りして、不実への権利をもたない内面的に弱い男が没落するのは当然だという道徳的判断が出てくるだけである。そこからは文学のもつ豊かさをくみとる視点はでてこないだろう。

もっとも、ワイスリンゲンやクラヴィーゴの場合には道徳的に判断されることを許容するような要素が作品内部にあることは事実である。つまり両者の場合とも、その不実の原因となるのは、腐敗した貴族社会での、あるいは宮廷での、立身出世を求める野心であり、それに役立たない婚約者を捨てるという筋立てである。だから二人の男は少女を犠牲にする以前に、野望追求という態度決定において、すでに道徳的判断を下されることを許してしまうであろう。ゲーテ自身の自己懲罰意識が、不実の構造をとらえるよりも、捨てられた少女への同情を前面に押し出させた結果でもある。

ところが『シュテラ』においては少しことなった様相を帯びてくる。

それにふれる前にここで簡単に『シュテラ』の筋を述べておこう。

フェルナンドは最初チェチーリェと結婚するが二、三年して娘ルーチェが生まれたころ、その結婚生活に束縛を感じて家を出る。やがて彼はシュテラと愛しあい、田舎へひきこもって彼女とくらすが、三年後またこのシュテラをも捨て、いずこへともなく去り消息をたってしまう。彼は、妻チェチーリェへの罪の意識にかられてシュテラのもとを去ったのだが、悪い友人にだまされて財産を失ったチェチーリェはすでにもといた町にはいない。彼女の行方の手がかりはつかめず、自分にも人生にも愛想のつきたフェルナンドは軍人になり、戦場に赴く。

以上のような背景がドラマの進行過程で明らかになる。さて、孤独なシュテラの相手をするために、ルーチェが母とともにシュテラの家のむかいにある旅館に現われるところからドラマははじまる。初対面のシュテラとチェチーリェは自分たちの愛情の対象が同一人物であるとも知らずにおたがいの境遇を告白し、そして理解しあう。そこへ突然帰ってくるフェルナンド、再会の喜こびに酔いしれるシュテラ、それと知って身をひこうとするチェチーリェの悲哀、すぐにもここを去ろうとする母娘をひきとめるようシュテラに頼まれたフェルナンドもやがて自分の妻であることに気付く。シュテラをあざむいて去ろうとする三人。何も知らずに輝やく愛の始まりの日々を回顧し、そのよみがえりをよろこぶシュテラ、がフェルナ

ンドの出発の意図もチェチーリェが彼の妻であることも旅館の娘のことばからシュテラに知れてしまう。驚き、赦しを乞い、おそれおののくシュテラ。彼女は孤独と絶望の中で立ち去ろうとする。混乱の中でなすすべを知らぬフェルナンド、彼を力づけ、打開の道を探るチェチーリェ、そして最後に三人はグライヒェン伯爵の話に導びかれて、二人がともにフェルナンドの妻として一諸に生きる決心をして手をとりあい抱擁しあうところで幕となる。初版のこの結末はのち、ワイマールでの上演に際して、シュテラは毒をあおぎ、フェルナンドもピストルで自殺をはかるという悲劇的結末に変えられる。

フェルナンドが最初の妻チェチーリェを捨て、また、シュテラからも逃げ出すのは何か具体的な仕事に対する情熱とか、野心からではなくて、模然とした自由な世界への憧れからである。チェチーリェを捨てるに至ったいきさつについては第三幕で執事の口を通して語られるが、この部分は、初版では次のようになっていた。

執事　「ではもうこんどはここにおとどまりなさいますのですか。放浪はもうおしまいになさるのですか。私も妻や子供をもってからというもの、この世界のかたすみが居心地よく思われるのです。以前にはあんなにもすべてが狭苦しく思えたものですが……」

「結局のところ、さがしたり、さまよったり、うろついたりというようなことがすべて何でしょう。……」

「あのやさしくてかわいいチェチーリェ様と結婚なさって二、三年たつと、あなたがどんなにお悩みになったか、何もかもがうまくゆかなかったこと、束縛され、捕えられたようにお感じになったこと、どんなにあなたが自由を求められたかを私はよく存じております。…」

「あなたはこういわれました。『フランツ、私は出かけなければならない。自分を縛りつけてしまうなんてばかなことだ。こんな状態では、私の能力はみな窒息してしまう。こんなことをしていては、私のあらゆる魂の力は奮われてしまうのだ。狭いところへとじこめられてしまうのだ。私のうちには、何もないというのか。何も発展することができないというのか。私は出かけねばならぬ。——自由な世界へ。』私たちは自由な世界をわたり歩きました。ここかしこ、あちこちへと流れ歩きました。そしてついには、あらゆる自由な気持にもかかわらず、退屈さから、何を始めればよいのかわからなくなってしまいました。——頭にピストルの弾を打ちこまずにすむには、もう一度頭も首ねっこもとらえられるしかなかったのです。」

「そうするといろんな力は自由に動き始めました。」

「するといろんな能力が展開しはじめました。」

フェルナンド「何をあざけっているのかおまえにはわかっているのか。」

執事　「あなたが何度も口にはなさいましたが決して実行なさらなかったこと、あなたが望まれましたが決して見出されず、そもそもいちども探しなどなさらなかったことについてでございます。」(3)

この部分が、1787年の版から「チェチーリェさまが元気で生々としたお嬢さまをお生みになったとき、しかし同時にあの方の活発さと魅力とを大分なくしてしまわれました。」（執事のせりふ、S．328）と家庭生活を続けてゆくうちに気の抜けたようになってしまった女を捨て新鮮な魅力をもった若い女へとはしってしまうという図式で、自由への欲求についてもシュテラの許からの失踪が「奥様とお嬢さまを見つけ出したいという純粋な欲求からであったか、あるいはまたひそかな不安からもどこかへ去りたいとしきりに願われたのか私にはよくわかりませんが。」（S．329）とひかえ目に述べられるにとどまっている。フェルナンドの

放浪の共犯者であるこの執事のことばは、フェルナンドの内面がいかなるものであるにせよ、彼の行動が世間の目からすればどう見えるかを知らせてくれるものである。
1787年版ではかなり薄められたとはいえ、いずれにしてもフェルナンドの不安がひそかなあいまいなものであって、「自由な世界」がどことも何であるとも明示されることはない。

ゲーテがフェルナンドに具体的な活動の場を与えることができなかったのは理由のないことではなかった。封建貴族の割拠する十八世紀ドイツの社会では、いまだ市民階級は独自の力をもたず、学問を身につけた市民も、活動の場としては、後のゲーテのように、啓蒙的な君主に招かれて宮廷政治にかかわるか、（この場合、貴族の専横のために幾度か挫折の悲哀を味わわねばならないだろう）法律家として弁護士などになったとしても、その無意味な形式主義になやまされねばならない。ここに登場する人物は身分は貴族であるが、貴族とて、特に下級貴族では貧しいドイツの現実は内容ある仕事を与え得ない。軍人として戦場に赴き、大きな世界にかかわるという道もある。しかし、大革命を前に昂揚した気分の中で、自由を求める烽起を抑圧する側にまわることは、当の軍人からすらまともなこととは見られていない。フェルナンドも、「自分自身と人生がいやになって」、戦争（1769年フランス・コルシカ戦争をさすとみられる）　に出かけるが、「気高いコルシカ人の死にそうになっている自由をおさえつけるのを手伝ったのだ」　（S.333）というシニカルな意識があるだけである。いかなる仕事にせよ、実際に具体的な仕事をフェルナンドに与え、それへの情熱ゆえに、彼が女を捨てることになれば、道徳的判断を避けえないという状況がそこにはある。だから、ここで、自由への憧れという抽象的な形で暗示されることにより、フェルナンドの不実という問題が出世か平穏な生活かという選択の問題でなくて、どうしてものがれようのない内面的な相剋であることが示されることになるのである。

ところが一方、またそれが、二人の女性にはじめて人生に目ざめるほどの深い愛を体験させるフェルナンドの性格を弱々しくさせることにもなっている。自分を縛りつけたくない、こんな狭いところで窒息してしまいたくない、自由な世界で思い切り自分の能力を展開させたいという願いも受け入れられる場がなければ、「退屈さから何を始めればよいのかわからなくなってしまう」だけなのである。シュテラへの愛が、自殺しなくてすむように再び一人の女性に自分を縛りつけようとしたことにほかならないと、執事が解説するのももっともであろう。「あの人には私の愛以上のものが必要だったのです。」（S.331）というチェチーリェの洞察にもかかわらず、結局、フェルナンドの見出したものはシュテラの愛でしかなかったのである。自由を求めつつも、無為への不安から、本能的であるが故に、まちがいないものと信じられ、また、自分の存在をまるごとつぎこみ得ると思われる、愛情に、存在のよりどころを求めざるを得ない。なにものにも拘束されない自由な人間という近代的自我の意識の背後にある不安をフェルナンドにかいま見ることができるであろう。

しかし、『シュテラ』では、これがテーマとして充分に展開されるわけではない。ここではむしろ、以上のような問題をはらみながらも決して醒めきったものになることのない、青春の日の輝かしい愛とその推移、黄金色の日々への愛惜、よみがえる愛と希望、不安と絶望、その間をゆれ動く心情の描写などに、ゲーテの重心は傾いているのである。

（2）

ところで当時のゲーテの実人生において、不実はどういう基盤から出て来ただろうか。

ルカーチは、十八才のゲーテがケーテ・シェーンコップへの愛について友人のベーリッュにあてた、「ぼくは何度も自分にいいました。もし彼女がぼくのものになったなら、死以外のなにものも彼女を抱くことを妨げるために、ぼくと争うようなことにならないとしたらどんなによいだろう。ところでぼくがいま感じていること、思いまよっていることを全部言ってみましょうか。――結局のところぼくは、彼女をぼくにお与えにならないようにと神様にお願いしているのです。」という手紙を引用して、愛の幸福のさなかにありながら、別離をさけがたいものとして受けとめている、ここに、若きゲーテの全恋愛悲劇の原型がある、と述べている。[4] それは、愛が成就されると途端に、その愛、その恋人が色あせたものになってしまうという恋の冒険家の心理などではない。

また別の手紙でゲーテは、「ベーリッシュ、きいておくれ、ぼくは彼女を捨てることはできないし、また決して捨てたくないのだ。だがぼくは去らねばならないし、去りたいのだ。でも彼女を不幸にすることはできない。……だのにぼくは無情にも彼女からあらゆる希望を奪ってしまうだろう。ぼくはそうせざるを得ないのだ。なぜなら、少女に希望を与える人は約束をするのだから。[5]……」とも書いている。近代の恋愛は完成されるには結婚を必要とする。しかし結婚が束縛であり、固定化をしか意味しないとしたら、自己の生成発展を願うものはためらわずにはいられないであろう。当時のゲーテにあっては、それは、結婚によって自分を市民社会に組み入れるか、市民社会をこえた創造的な生を選ぶかを意味していた。約束することのできなかったゲーテはシュトラスブルクでもフリーデリケを捨てなければならない。そして、1776年婚約まで結びながら、リリーと別れるのも同様の事情によるものであった。両家の承諾のもとに婚約を結んでからも、ゲーテ家とシェーネマン家はなんのつながりもなく、交際がなされるわけでもなく、両家の風習のちがい、宗旨のちがいにもとづく周囲の反対が彼らの結婚を妨げていたが、晩年に「我々をとらえていた障害は根本においてはのりこえられないものではなかった。――しかし、彼女は失われてしまった。[6]」とエッカーマンに悲痛な調子で語っているように、最大の原因はゲーテの内面にあった。

具体的には、婚約―結婚は、ゲーテにはっきりした職業をもつことを要求した。当時、ゲーテはすでに『ゲッツ』と『ウェルテル』により文学的名声を獲得はしていたが、作家として生きる決心をかためていたわけではなかったし、そもそも、当時のドイツでは、読者層も小さく、有効な著作権法があるわけでもなく、著述によって金を嫁ぐことは作家にとって特に詩人にとっては作品を汚すものであると考えられていたため、著作だけで生計をたてるなどということはとうてい不可能であった。[7] 当時のゲーテは日中は父を援けて弁護士として法律事務の仕事に精出しながら、あふれるような創作欲にまかせて数々の詩作をおこなっていた。弁護士の仕事に対する気持を晩年のゲーテはひかえ目にしか語っていないけれども、弁理士業か代理士業といった仕事をやらないかというさそいにもゲーテ自身はあまりのり気でなかったようである。[8] また1772年5月から9月にかけてウェッツラールの高等法院で、停滞した裁判の状況に身をもって接した体験などもゲーテに司法の世界への失望を味わせていた。『詩

と真実』での抑制した口調にくらべ、当時の手紙は、こうした仕事が決して彼の心にかなったものではなかったことをはっきりと伝えている。「またもや、ぼくはこっぴどく坐礁してしまった。ぼくがだめになってしまわないなんて、自分で平手うちを加えてやりたいくらいだ。だってぼくは浮上していたんだから。ぼくはまた待っていて新しい機会を手に入れるつもりだ。ただ君が場合によっては少し金銭的な援助をしてくれるつもりがあるかどうか知りたいのだが。ただ、最初のひと突きだけでよいのだけど。ともかく君は次に父にあったとき、はっきりと表現してほしいんだ。ぼくを春にはイタリアへやらなくちゃならないと。つまり、今年の終りにはぼくは出発しなくちゃならない。この水盤の上でゴンドラを遣ぎまわったり、仰々しく儀式ばって蛙狩りや蜘蛛狩りに出かけてゆくなんて、そのときまでももうつづけられそうにもないのだ。[9]」 ボイトラーによると、ゲーテの弁護士としての仕事はまさに、水盤でゴンドラを遣いだり、大げさに狩りに出てゆくかと思うと獲物は蛙や蜘蛛にすぎないといったぐらいのものであったのだ。ボイトラーは法律得業士、弁護士ゲーテが陪審員に提出した請願書を伝えている。

「Wohl-und Hochedelgeborne, Gestrenge, Vest-und Hochgelahrte, Hochfürsichtige und Hochweise Herren; Großgünstig, Hochgebietend und Hochgeehrteste Herren Gerichts Schultheiß und Schöffen!」

こういうのが不動産担当権とか遺産相続の訴訟、債務の不履行についての訴答書面の、あるいは牧草場をめぐる農民たちの訴訟の書き出しであり、こういった書面を若きゲーテはせっせと作成していたのである。[10]『シュテラ』と相前後して書かれた『ヴィラ　ベラのクラウディーネ』の中のクルガンティーノの「私の生きる舞台がどこにあるというのだ。市民社会が私には耐えられないのだ！[11]」というせりふはそのままゲーテの内面を映すものといえそうである。

リリーとの婚約解消はこういう世界への訣別を意味していたので、断ち切れぬ思慕の念に苦しめられながらも一種の晴れやかさがでてくる。『詩と真実』によると「私がまだリリーを妻にすることを希んでいたころには、市民的仕事を理解し行使するのに全努力を向けていたので、今や私を彼女からへだてたおそろしい間隙を生々とした、魂の豊かなもので満たさねばならなかった。そこで私は実際に『エグモント』を書き始めたのだ。[12]」と、ゲーテ自身は市民的仕事とそれの約束する平穏な生活に別れを告げて、豊かで生々とした生産活動を文学創造に求めたのであった。十八世紀ドイツ社会の現実の貧しさはのちのワイマールにおいても決してゲーテに豊かな活動の場を提供したとはいえない。

フェルナンドの不実という問題はのちのファウストに全面的展開をみることになる。ゲーテの実人生におけるような芸術創造という方向をとらないとすれば、現実のドイツ社会をこえて人類史的な構図の中に置かなければ、おそらく充分には追求できない問題だったのではないだろうか。

(3)

この『シュテラ』が書かれたころのゲーテの周辺を年譜から拾いあげると次の様である。1775年1月、フランクフルトの銀行家の娘、リリー・シェーネマンと識りあう。おたがいにひ

かれるが、ゲーテはリリーをとりかこむロココ的雰囲気になじめない。そして1月18日、未だ会ったことのない女性グストヒェンに、この間の自分の悩みをうちあける手紙をはじめて送る。2月13日、彼女あての手紙で「今、ぼくがドラマを書いていなければぼくはだめになるでしょう。」と書くがこのドラマの中にこの『シュテラ』も含まれていたろうと思われる。3月から4月にかけて、リリーの伯父の別荘があったフランクフルト近郊のオッフェンバッハにしばしば赴く。3月6日、ヨハンナ・ファールメールあての手紙ではじめて『シュテラ』に直接言及、そして4月末この稿本をヤーコビは入手する。4月ごろ、ゲーテはリリーと婚約するが、周囲の反対、またゲーテ自身のためらいもあり、この葛藤をのがれるために5月、スイスへ旅行、しかし7月に帰郷後も依然としてリリーへの思いは断ちがたく苦しむがついに9月婚約解消、11月、ワイマールに赴く。多分、ワイマールへ出立する前に出版を依頼していた『シュテラ』は「恋人たちのためのドラマ」という副題をそえてベルリンのミューリウス社から、翌1776年1月、出版された。

このように『シュテラ』執筆の時期はリリーへの愛の芽生え、昂揚、婚約、葛藤の時期であり、愛にひかれながら束縛を恐れるフェルナンドに投影されたゲーテの姿を想うとき、リリーがシュテラにうつっていることは疑いないだろう。音楽会での最初の出会いなどもリリーとの出会いを思わせるし、ボイトラーの指摘によると、「それは私が生まれてはじめて感じた最も甘美な混乱 (Konfusion) でした。」とか「どうしても (un alles Gold) あなたをまっすぐ見ることができませんでしたわ。」「あなたと私とどちらの方が当惑したでしょうか (wer war konfuser？)」というような語は若きゲーテの語彙にはなかったものでリリーの語法であろうという。[13]

あるいはまた、ダルムシュタットの宮廷に集まっていた才知豊かな女性たちの一人、リラと呼ばれた女性、ルイーゼ・フォン・ツィーグラーの姿とシュテラとの類似点をあげる人もいる。ルーチェたちを待ち切れない、シュテラの「子供のような」性急さ、孤独への恐れ、ひとりになりたくないために、犬や鳥を飼っていたこと、庭に自分の墓をこしらえ、戸外で読書をしたり、ものを書いたりしたこと、悲しみの中でも忘れぬ親切さとやさしさ、幾度か与えられる「天使 Engel」という呼称又は「バラ Rose」という呼びかけ、月への心酔、等々がそっくりそのままリラのことを伝える手紙などの中に見られるというのである。[14]

また、第四幕冒頭の、そして第五幕での悲痛な心情を訴えるシュテラのモノローグには、オシアンの雰囲気がみなぎっているし、ここの、「私の心があなたに向かってとびあがったとき、(mein Herz dir entgegen sprang)」とあるのは、ピェティスムの辞典に、「Mein Herz geht im Sprüngen」[15]とあるようにピェティスムの雰囲気をもただよわせている。いずれにしても、リリー体験を直接的契機として書かれたシュテラだが、単にリリーとかリラとかの一モデルにとどまらず、当時の感傷的、情緒的時代の中で息づいている一人の女性の姿が浮かびあがってくる。感情や情緒が前面に押し出される雰囲気のなかで女性は何よりも愛に、そして愛のみに生きる。『シュテラ』にはそういう女の幸と不幸があますところなく形象化されている。そしてシュテラは、その幸、不幸のまっただ中に身を置いているが故に、自分の位置に自覚的であるチェチーリェよりも一層幸福でありまた一層不幸にもなるのだといえよう。シュテラに、フェルナンドへのひそかな不信—なぜ自分たちが伯父のもとを逃げ出し、あらゆるものを捨ててこの片田舎にひきこもらねばならなかったのだろうかとひ

そかな不信がめばえようとした時も、「娘を獲物としてああいうふうにひそかに盗み出すのが男の気まぐれ (Grille) だとしたら……」「娘をああいうふうにたったひとりだけなんの景品もなしに手に入れるのが心のほこり (Stolz) だとしたら……」(S. 338)、と、男の世界を気まぐれとかほこりとか心理的感情的なものとしてとらえるのに対してチェチーリェはそれを構造的に理解する。「男のあの人は自分の世界から、根本的にはなんの共通点もないわたくしたち女の世界へ、ひきうつされてきたのです。はじめのうちしばらくはみずからも欺いておりましたが、さていざ彼の目がめざめてみると、あわれなのはわたしたちです。」(332) このことばは、小人の王女と結婚するために魔法の指輪で自分も一たんは小人になりながらその小さな世界に安住できず、王女との愛をあきらめる巨人の王子というあの『新しいメルジーネ』の童話をおもわせる。[16] 愛以上のものを求めて広く大きな世界にとび出す男と、狭い限界内で愛に生きる女というこの世の構造から生ずる矛盾である。そしてチェチーリェはこれらすべてを冷静に意識していて、「わたしたちは男のことばを信じますわ。情熱的な瞬間には男は自分自身をさえあざむいているのです。わたしたち女があざむかれてならないわけがどこにあるでしょう。」とその偽瞞にもむしろ積極的に身を任せようとする。しかしだからといって彼女がそういう偽瞞に苦しめられないわけではない。彼女たち三人が混乱と絶望に陥ってなすすべを知らぬ時に彼女が下す理性的決断—「愛情のゆえに愛情そのものをさえ犠牲にすることのできる妻というものの感情」からチェチーリェひとりが身をひくことによって混乱の糸を断ち切ろうという提案も、フェルナンドが正しく言うとおり、やはり自己偽瞞なのである。彼女もフェルナンドとの愛のあまりにも幸福な感情を遁れることはとうていできないのだ。

チェチーリェもシュテラもフェルナンドを通して人生に目を開かれたことは同様であるが、シュテラが、「そうなると少女というものは頭のてっぺんから足の先まですべて感情になってしまいますわ。」(S. 320) というせりふにあるように、全身全霊をフェルナンドで満たし、一体化しようとするのに対し、チェチーリェはフェルナンドを通し、フェルナンドの愛を通してこの世のいずこに自分の身を置くべきかを知ったという意識がより強い。「人生というものに深く見入り、われわれを待っている喜こびと悩みとを予感するたびごとに手をひいてこの世を歩んでくれる夫というものがほしくなりました。わたしの若いこころが捧げることの出来る愛情のかわりに年老いてからはわたしの友となってくれる人、わたしがその人のために両親を見捨ててしまっても両親にかわってわたしの保護者となってくれる人、これが夫というものだったからです。」(S. 330) 愛情即ち結婚によって親の手から夫の手へと移り、社会的歴史的位置へと自分を組みこんでいくという認識が彼女にはある。

ところがシュテラの内面は歴史的存在の意識に乏しい。シュテラの愛も生活もチェチーリェのとはちがって、純粋な愛、原型化された愛の様相を帯びる。シュテラの意識には、社会制度としての結婚、それによって自分が現実の社会での位置を得る、そういう結婚はなく、フェルナンドとの一体的愛を生きるという意識があるのみである。シュテラが一切の社会関係を離れ、肉親との関係をも断って二人だけで生きていることはそれを示すものであろう。愛を結婚に結びつけ、そこから堅実にこの現世での生き方を歴史的永続性として築こうとするチェチーリェに対し、シュテラはすべてを捨象する。「あなたは心の中に天国をおもちですわ。」(S. 319) 「あなたはまだあの若々しくて純粋な人間性 (Menschheit) の感情の中に

生きていらっしゃるのですわ。」(S.320) とチェチーリェはシュテラを評していうが、これはシュテラ個人の生における、いまだ人生の深淵を知らぬ、けがれない、愛をそして男を疑うことを知らぬ青春の時であるとともに、女がまだ、愛情によって男に全面的に合一することに全幅の信頼をよせ得た、人類の黄金時代でもある。しかし一人の女性にとって一人の男性がそのすべてであること、それほどまでに没我的な愛の感情に身をひたし得ること、一人の男性を通して全世界を見ることができること――これは恋する女の幸福でもあり、夢でもあるがまた、独自の生を持つことを許されなかった女性の置かれた位置から生ずるものでもある。フェルナンドの裏切りを悟るときシュテラの存在は足もとから瓦解し、世界から自分が拒絶されたように感じる。シュテラもチェチーリェもともにその生き方は危殆に瀕する。そしてそれにもかかわらずこの二人はその生き方をのがれ得ないのだが、娘のルーチェは、男に頼らず、自立的に生きていこうとする、母の世代とはちがった新しい少女として登場する。彼女はシュテラやチェチーリェの体験した絶望や無力感を味わうことはないだろう。しかしまたこの二人がフェルナンドとの愛において経験したような種類の幸福をも決して味わうことはないだろうことも予測されるのである。

チェチーリェとシュテラの間にはさまれて身動きのとれなくなったフェルナンドは、「おれの方がお前たちよりもっとみじめじゃないか、お前たちは何をこのおれに要求するのだ……どの女もおれの全部を要求する。」(S.343) と自分を逆に犠牲者のように感じる。このフエルナンドの弱さにくらべると、二人の女性の明確な個性と強さは全体を通じて印象的である。外への拡がりをもつが故にとび散ってしまいそうな男の心より、たとえ狭く限界づけられていようとも、いや限界づけられているからこそ、二人の女の心ははるかに深く強いものとなる。そしてそれはゲーテの自己懲罰意識による制約をうけていないため彼女たちへの感情の思い入れはより一層深い。

(4)

『シュテラ』は1805年ワイマールでの上演に際して悲劇に改作されるが、いわゆる二重結婚に終る初版は出版と同時に毀誉褒貶さまざまな反響をよびおこす。この時代の文学批評は文学の内在的価値や生々とした想像力の有無を論ずるよりも安全な道徳的見地にたって作品の道徳性を論難し、人生の教訓を求めるというのが常だったから、このドラマもまた、いとうべき好色家が最後に幸福をつかむものだと解されて非難をよんだ。ある道学者流の批評家は、「小説ウェルテルは自殺の手引きであり、シュテラは誘拐と多妻との手引きである。青年への何というすぐれた手引きであることよ！」[17] あるいは、「軽薄な好色家と娼婦」[18]といった口吻で非難するかとおもうと、「恐らく郵送の途上で失われたにちがいない第六幕を印刷させることが、自分の義務であると考えた」として、フェルナンドは逮捕され、シュテラは伯父に連れ戻され、チェチーリェも父の許に帰るという内容の『シュテラ、第六幕』というのが書かれたり[19]、さらにはフェルナンドとそっくりの弟、フェルナンド二世という人物を登場させてシュテラと結婚させるという戯作があらわれたりしている[20]。当時の文学的雰囲気がどんなものであったかが窺われるだろう。しかしこういう批評にまじってこのドラマが上演されたときの次のような報告がある。「観客は非常に無感覚で無感情だったので私は全く腹立

たしかった。桟敷でも平土間でも誰の目からも涙は流れなかった。……そして私は、フェルナンドが二人の女を抱擁する結末でのばかげた大笑い以外にはいかなる感情の表出も認めることができなかった。[21]」この評者はゲーテに同情的で観客の側にも俳優の側にも新しい演劇を理解する柔軟さがないことを嘆くのだが、この観客の正直な反応はたしかにこのドラマのもつ弱点を率直に感じとっている。なぜならこの二重結婚という結末は、道徳的偏見なしに純粋に作品自体として眺めた場合でもいささか安易な解決で、特に実際に上演されて視覚的なイメージが換起されたとき、その印象がいっそう強められるだろうことは予想されるからである。この解決は1775年の時点でのゲーテの意志を濃厚に反映したものであるが、彼自身も決してこの解決を内的には信じていなかったのであろう。だからこそ、後にゲーテ自身の人生が『シュテラ』の雰囲気から遠ざかったとき、フェルナンドとシュテラの二人が自殺する悲劇につくりかえることができたのである。

結末部を眺めてみよう。混乱のなかから、なんとか解決の糸口を見つけ出そうとつとめるチェチーリェはグライヒェン伯の故事を語る。これは短いけれども、たとえ話として引かれるだけには惜しいほど、鮮やかでくっきりとしたことばで語られる物語で、ここで使われたことばをそっくりそのままゲーテは、フェルナンドたちに用いさせる。時代は遠い中世、伯爵と異国から連れ帰った、彼の救い主である娘、そして彼の奥方との間にかわされることば、「そっくりあなたのものであるこの人の半分をとって下さい。(Nimm die Hälfte des, der ganz dein gehört.)」「わたしたちはあなたのものですわ。(Wir sind dein.)[22]」を三人はそのまま引用し、あとは短い感嘆のことばと呼びかけを発するだけで、三人の共生の決断がつけられる。しかし、当惑して逃げ出しそうになるフェルナンドをチェチーリェがとらえてシュテラにさし出し、三人が抱擁するに至るという喜劇になりかねない動作も戯曲であるからにはまぬがれ得ない。十八世紀ドイツの現実に十字軍の時代の伯爵の物語はそのまま並べられただけでは道具だてがちがいすぎるだろう。リアルな場に夢を直接的に置くだけでは、決して普遍的なイメージを与えず、一歩まちがうと卑俗でいかがわしい連想をしか呼びおこさないだろう。

だからといって悲劇に終る結末では、いかに理念的に整合しようとも全体の雰囲気をこわすことになるだろう。このドラマの登場人物はみな非常な善人で、悪役がいない。特にシュテラとチェチーリェは現実には恋敵であるのに嫉妬も憎しみも知らず、たがいに深く共感し理解し、同情し、赦しあう。そのため、ドラマとしての発展性や緊張感が稀薄になっているが、独特のユートピア的雰囲気がかもし出され、誰かひとりを排除して築かれる生活という普通の三角関係の清算ではなくて、二人の女性のどちらもが、身をひくことなしにフェルナンドのかたわらでともに愛に生きるという一見不可能なメールヒェンのような解決が出てくるのだろう。シュタイガーが、悲劇への改作について、「今や弱点は耐えがたくなる。が長所は個有の意味を失ってしまう。若い花の香りがなくなるように夢みるようにたわむれていた希望もなくなってしまう。[23]」と、のべているのは正当だろう。

このシュテラたちの感情の息吹と夢は、ゲーテの文学では、のちに増幅されて、『親和力』でより象徴的なイメージを獲得することになるのではないかと私には思われるが、若きゲーテはここではまだ、若々しい感情への信頼に素直に身を置いていて、晩年のイロニーとは程遠く、ために、晩年の作品のもつ様式は勿論、いまだ獲得されていない。

（5）

さて、ゲーテは、リリーへの愛と併行して、生涯一度も実際には会うことのなかったグストヒェン（Auguste zu Stolberg）という女性に手紙を出し続けた。この手紙で、ゲーテは、リリーへの愛において味わった幸福と絶望をそっくりそのまま、その瞬間々々に告白し、リリーからのがれられない自分を時に揶揄し、未見のグストヒェンへの憧れを切々と述べる。『シュテラ』に見られるのと同様の若々しい夢見るような感動の充満した書簡である。これは一見、グストヒェンへの愛の手紙のようであるが、ゲーテにこれを書かせたものは、彼女への愛というより、自己懺悔、自己告白の欲求であり、自分の思いを、行いを、外から、第三者を介在させて眺めたいという望みである。だからリリーへの愛に結着をつけ、ワイマールへ移住するとともに手紙は次第に儀礼的になり、呼称も du からSie にかわり、間隔も間遠になり、消えてゆく。ところが、ゲーテはこの青春の輝かしい一時期の告白の相手、グストヒェンについて自伝では全く触れず、多分、意識的に沈黙していたのに対し、グストヒェンの方はこれらの手紙を神聖な宝物（ein Heiligtum）のように大切に保存していたという。[24] この手紙が二人にとって持っていた重みの相違は明らかであろう。このグストヒェンへの手紙に深い愛着を感じていたリルケは次のような手紙を残している。「この人（ゲーテ）はいかなる天性を恵まれて、この世へ生まれてきたことでしょう。この世のなりゆきをいかなる魂の明敏さでいかに理解していることでしょう。ところが相手は年が若くて邪推してしまったのです。ああしかも時代は二度と言わせないでそのまま去ってしまったのでした。」[25] 勿論、ゲーテにとってグストヒェンそのひと自体はどうでもよかったというのではなく、当時の彼にとって十全の重みをもつ存在であったことは書簡を読めばわかることなのだが、その時においてさえ、これはゲーテの自己表現、自己客観化の一手段であり、彼女がすべてなのではなかった。

グストヒェンをも捨てられた少女だというのは言いすぎになるだろうけど、捨てられたシュテラの心情は必ずしも彼女に無縁ではあり得ないだろう。青春の日の光輝を契機により一層、創造的な生を追い求める男に対し、愛という一点において精神の深さでは決して劣るものではないけれどそれがすべてである、女の一生、――その哀切さに深く観入しながら、ゲーテは、最後の瞬間にその愛の対象から身をもぎはなして不実を余儀なくされ、そうすることによってかえってその愛はますます輝きを増して文学の中に形象化されてゆく。

行動をおしとどめられ、延期させられながら、若きゲーテの文学は豊かな自己肯定をみなぎらせ、決して敗北者の文学になることはないのである。

註

テキストは、*Goethes Werke,* Bd. 4, *Stella,* Hamburger Ausgabe, 1968. を使用し、引用文の頁数を文中に（　）で示した。

（1）*Goethes Werke,* Bd. 9, *Dichtung und Wahrheit,* Hamburger Ausgabe, 1967, S. 498.

（2）H. A. Korff: *Geist der Goethezeit,* Bd. 1, Koeler und Aemelang, Leipzig, 1954, S. 253ff.

（3）J. W. Goethe: *Stella,* in: *Der junge Goethe,* Bd. V. Walter de Gruyter, Berlin, NewYork, 1953, S. 92ff.

(4) G.Lukács: *Fauststudien,* in: *Goethe und seine Zeit,* A.Francke AG Verlag, Bern, 1947, S.180ff.

(5) *Goethes Briefe,* Bd. 1, Christian Wegner Verlag, Hamburg, 1968, S.64f.

(6) J.P.Eckermann: *Gespräche mit Goethe,* Insel−Verlag, Wiesbaden, 1955, S.646.

(7) この間の事情については、W.H.ブリュフォード著、上西川原章訳『十八世紀のドイツ』三修社 1974年によった。

(8) *Dichtung und Wahrheit,* a.a.O. S.112.

(9) Brief an Merck, etwa 4. August 1775, in: *Der junge Goethe,* a.a.O. S.249.

(10) E.Beutler: *Essays um Goethe,* Carl Schünemann Verlag, Bremen, 1962, S.303.

(11) *Claudine von Villa Bella,* in: *Der junge Goethe,* a.a.O. S.177f.

(12) *Goethes Werke,* Bd.10, *Dichtung und Wahrheit,* Hamburger Ausgabe, 1966, S.170.

(13) E.Beutler, a.a.O. S.291.

(14) Fritz von Jan: *Ein Modell zu Goethes Stella,* in: *Euphorion,* Bd. 1, 1894, S.557ff.

(15) Anmerkungen zu *Stella,* in: *Der junge Goethe,* a.a.O. S.434.

(16) この童話はゼーゼンハイムでフリーデリケに語ってきかせたことが、『詩と真実』にみえるが実際に執筆されたのはワイマールでクリスティアーネとの結婚の時期にあたることは興味深い。

(17) *Goethe im Urteil seiner Zeitgenossen,* Bd. 1, gesammelt und herausgegeben von J.W.Braun, Georg Olms Hildesheim, 1969, S.228.

(18) a.a.O. S.240.

(19) a.a.O. S.282.

(20) a.a.O. S.288.

(21) a.a.O. S.277.

(22) *Der junge Goethe,* a.a.O. S.116.

(23) Emil Steiger: *Goethe,* Bd. 1, Atlantis Verlag, 1952, S.186.

(24) Nachwort von Jürgen Behrens, in: *J.W. Goethes Briefe an Auguste Gräfin zu* Stolberg, Verlag Gehlen, 1968, S.95.

(25) Brief an Füstin Marie von Thurn und Taxis, am 3. Aug. 1912.